

第一日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2017 (平成29年) 10. 8

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

聖書と祈り会
毎週水曜日 10:30～
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

「これぞ神のみわざ」

(テサロニケの信徒への手紙一「三」)

牧師 松谷 祐二

テサロニケの信徒への手紙一 第二章一～二節
兄弟たち、あなたがた自身が知っているように、わたしたちがそちらへ行つたことは無駄ではありませんでした。無駄ではなかったどころか、知つてのとおり、わたしたちは以前フリーピで苦しめられ、辱められたけれども、わたしたちの神に勇気づけられ、激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語つたのでした。わたしたちの宣教は、迷いや不純な動機に基づくものでも、また、ごまかしによるものでもありません。わたしたちは神に認められ、福音をゆだねられているからこそ、このように語っています。人に喜ばれるためではなく、わたしたちの心を吟味される神に喜んでいただくためです。あなたがたが知っているとおおり、わたしたちは、相手にへつらつたり、口実を設けてかすめ取つたりはしませんでした。そのことについては、神が証してくださいます。また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。わたしたちは、キリストの使徒として權威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、わたしたちはあなたがたをいとおしく思つていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願つたほどです。あなたがたはわたしたちにとつて愛する者となつたからです。兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えていてほしい。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした。あなたがたの信者に対して、わたしたちがどれほど敬虔に、正しく、非難されることのないようにふるまつたか、あなたがたが証しし、神も証してくださいます。あなたがたが知っているとおおり、わたしたちは、父親がその子供に対するように、あなたが

た一人一人に呼びかけて、神の御心にそつて歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした。御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます。
(新共同訳聖書)

パウロは、このくだりで、「あなたがた自身が知っているように」とか「知つてのとおり」といった言葉を何度も使っています。「あなたがた」すなわちテサロニケの信徒たちが証言(「証し」)してくるだけでなく、神が証言してくださる、とも二度言っています。疑いようがない、本当だ、ということですよ。何が本当なのかというと、パウロがテサロニケで伝道した成果、その動機、やり方、どれをとつても、非の打ちどころのないものであつた、ということが、です。

なんだか自慢たらしいなあ、とも思えそうな文章です。「あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした」、人に褒められたくてしたのではない、という内容なのですが、そう書くことで、パウロは結局、自分を良く見せたいのでしょうか。

そう取られかねないような書き方をパウロが覚えてしたとすれば、なぜか。ひとつの可能性は、宛先の教会の信徒たちが、最初はパウロの伝道によってキリスト教に入信したけれども、後になつてパウロのことを信用しなくなり、別の教えにそれていった、ということですよ。パウロがそれを心配して、初心に帰つてもらうために、「あなたがたが知っているとおおり」と、最初の伝道の純粋さをあえて強調した、というわけですよ。

しかし、このテサロニケの信徒への手紙では、パウロはどうも、そういう悲しむべき事情で書いたのではなさそうです。彼は前の段落でも、「あなたがた一同のことをいつも神に感謝していただきます。あなたがたが信仰によつて働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに對する、希望を持つて忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。」(一章二～三節)と言つており、パウロとテサロニケの信徒たちの心は、離れてし

まったのではなく、今も一つであるようですから。とすると、パウロが「知つてのとおり」と書くのは、宛先の信徒たちと一緒に、「全くその通り!」、とうなずき合うようにして思い起こせるような内容だからなのです。一方のパウロは「激しい苦闘の中であなたがたに神の福音を語つた」と言い、「わたしたちの労苦と骨折りを覚えていてほしい」と言います。他方の信徒たちも「愛のために労苦し」、「あなたがたはひどい苦しみの中で、聖霊による喜びをもつて御言葉を受け入れ、わたしたちに倣う者、そして主に倣う者となり、マケドニア州とアカイア州にいるすべての信者の模範となるに至つた」と、前の段落で書かれています(一章三、六、七節)。

パウロと信徒たちの苦闘、労苦といったことは過去のことでなく今も継続中であつて、第三者が論評すれば、「あの連中は骨折つて無駄なことをしている」と言うかもしれないのです。「新奇な宗教を広めて金をかすめとろうとしている」とか、「使徒とかいう幹部が權威を振りかざして支配している。世の中の他の組織といっしょだ」とか言うかもしれないのです。そう言われ続けると、信徒たちも自信を失うかもしれません。

「でも、そうじゃないですよ」と、パウロと信徒たちは再確認し合つていっているのです。パウロはかく伝えた。不純な動機なしで、ただ神に福音をゆだねられたから。人ではなく神に喜んでいただくために。高ぶらず、取るに足らない幼子のようにへりくだつて。母親のように愛し、父親のように励まし、慰め、勧めた。御国へ、栄光へと招き

たもう神の御心にそつて生活するようにと。ちよつと出来すぎじゃないかというほど、純粋な伝道者の姿です。しかし信徒たちはたぶん知っています。パウロが人格者だったのではなく、教会の迫害者パウロを変えて伝道者となつたキリスト・イエスが、その父なる神が、神の愛を、パウロを通して現わしてくださつた。わたしたちも皆、同じように生きようとしている。パウロに倣い、主に倣おうとしている。「素晴らしいことじゃないか」と、感謝しながらうなずくのです。

一瞬の夏

六戸 信次郎

このところ、夏の間は山に生活の基点をおいて、過ごしています。今年の夏は、この十数年でも最悪の年となりました。とにかく、天候が悪い。晴れた日がほとんどないまま、いつのまにか八月の下旬になってしまいました。千メートルを超える我が山小屋では、霧と雨の日が続きました。日照不足の影響は地産の野菜を直撃し、毎年この時期になると、山のように出てくる、トウモロコシや、枝豆も数も少なく、元気がありません。最近の新聞記事によれば、今年のお米の出来栄は、我が家のある栃木県だけが、日照不足で不良とのことでした。毎日、雨や霧に閉じ込められていると、せつなく涼しく、快適なはずの山小屋生活も、なにか気が滅入ってくるものです。日中でも、うすら寒い時もあり、車下の町まで、買い物兼ねて、温まりに行くこともしばしばでした。



いつまでたっても、夏の天候が戻ってきそうもない、と考えて、そろそろ東京に帰る準備をしようと思い始めたある日、突然雲が切れて、目前に青空が広がりました。

報告

- *高橋優美子神学生が、兵庫地区四教会での夏季伝道実習を終えて、無事帰京されました。
- *当教会出身教職の松井容子先生から、「松井敏郎 説教メモ」をご寄贈いただきました。
- *日野靖子姉が、日本基督教団

それまで霧に包まれていた外のモノトーンの景色が、まぶしいほどの光の中で輝いて見えました。急に気温が上がり始め、季節が夏であることに気が付いたみたいです。セミも鳴き出しました。この夏で、小鳥やセミの鳴き声を聞いたのはほんの数回だったと思います。それが、あちこちで、一斉に鳴き出したのです。そして、突然、トンボも飛び始めました。それまでどこにいたのか、と思うほど沢山のトンボです。外は一瞬のうち夏の季節になっていました。全てが輝いており、生き生きとした瞬間だと感じることが出来ました。

やはり私たちは光が無くては生きていけないのだ、と感じた瞬間です。光さえあれば、こんなにも生き生きと生きることが出来る。動物も、植物も、そして私たちも。普段あまり気が付くことが少ない、神様から与えられている恵み。そのことに改めて想いを馳せることが出来た、今年の短い夏でした。神に感謝。

ひかり ひかり わたくしたちは
ひかりのこども ひかりのように
あかるいこども いつもあかるく
うたいましょう
こどもさんびか 五十二番

田園調布教会から当教会へ転入されました。

*各献金（熊本・大分地震被災教会支援献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、オルガン献金、会堂建築献金）へのご協力も、引き続きよろしく願います。

《各部報告 九月度》

成人会

日時 九月十七日 主日礼拝後
場所 会堂会議室
出席者 八名
開会祈祷 水沼和子姉
内容 エレミヤ書二十五章〜二十九章を読む。

神は神に従わないイスラエルの民にバビロンのネブカドレツアルを用いて災いを下す。いわゆるエルサレム陥落とバビロン捕囚である。バビロンに捕えられた神の民イスラエルの民にエレミヤを通して神の計画が告げられる。これは災いではなく平和を与える計画であり民に将来と希望を与えるというものであった。七十年という長きに渡り敵地で過ごす民へ現実を受け入れて心得ておくべきことが告げられる。それは敵地においても人口を増やし平和に暮らすこと。敵対する町の平安のため、迫害する者たちのために祈るなら神は民を豊かに顧み平安を与えられる。心を尽くして神を求めよ。次回は十月十五日、三十〜三十五章。司会は鈴木晋兄。黙祷をもって閉会。

婦人会

日時 九月二十四日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室

出席者 八名
開会祈祷 菊地才知子姉
閉会祈祷 個別に小祈祷
内容 一、聖書研究

「コヘレトの言葉」第9章〜第12章
全員で輪読の後、松谷牧師の解説を聞いた。第九章 人の人生において起こることは、すべて神様のご計画になることで、善人、悪人や賢人の別なく、人が思うようにできることではない。命ある間の人生で、死んでしまえば何もかも無である。食事を楽しみ、清潔なおしゃれをし、家族円満を心がけて、楽しく人生を送ることが労苦をする自分への報いである。何であれ、手掛けたことは、熱心に行うことだ。いつかは来る死後はもう何も出来ないから。能力や才能に恵まれても、人間は好機がいつかを知ることができない、機会を逃したり、不幸に見舞われたりする。貧しく、目立たない賢人は、侮られ、無視される。

第十章 人生は矛盾だらけだが、備えておくことで災難を避けることができる。わかったようなことを言う人がいるが、先のこととはだれにもわからない。役人が勤勉であることは素晴らしい。怠けていれば、生活は惨めになる。勤勉で生活を楽しむのが良い。親友も裏切ることがある。権力者を批判するときは慎重に。

第十一章 何事も独り占めせず、仲間と分かち合っておけば、必要な時に自分が援助して貰える。全ては長く続かない、だから良い時を大切に楽しみなさい。

第十二章 若く元気なうちに、神に感謝して、生活しなさい。人生は儂く、年老いて、人は死んでいく。「神を畏れ、その戒めを守れ。」これが人間の生き方の全て。

二、愛餐会の打合せ